

乾漆八部衆立像 国宝

日本の仏像の傑作で、インドの神話から仏教に転向し、仏陀とその教えを守護する役割を担うようになった 8 人の神の姿を表現している。この 8 人の神は国家守護の主な経典のひとつである金光明經に記載されている。これらの神々が仏教寺院の中に存在しているということは、仏陀の教えがすべての衆生のためのものであるという信仰を反映している。

これらの像は 734 年につくられた。乾漆造で、中は空洞になっている。元来は興福寺の西金堂に収められていたが、西金堂は火事で消失した。この 8 体は阿修羅、五部浄、沙羯羅、乾闥婆、緊那羅、鳩槃荼、畢婆迦羅、迦楼羅である。しかし、これらは仏教の経典に登場するデーヴァ（神）、ナーガ（蛇または龍）、ヤクシャ（死者の霊）、アシュラ（半神または巨人）、マホーラガ（蛇の霊）、ガンラルヴァ（楽人の鬼神）、キンナラ（天上の楽人）、ガルーダ（蛇を食べる巨大な鳥）を表現している可能性もある。

これらの像のユニークな点は、阿修羅、五部浄、沙羯羅、乾闥婆は若い少年の顔をしているということである。研究者たちは、これには、この像の建立を命じた光明皇后（701～760 年）（興福寺の創建者である藤原不比等の娘）の願いが込められていると考えている。

8 体の像すべてが、1300 年間に興福寺を襲った複数の火災を免れた。重要なポイントは、これらの像が持ち運びやすいということである。ほとんどが重さ 10kg 以下であり、安全な場所に持ち出しやすい。